

病禍の記憶

Ⓣ

大正期のスペイン風邪

2020.4.28

熊本の医学のほか、文学や歴史にも造詣が深い熊本機能病院顧問で医師の小野友道さん(79)は熊本市中
央区に、現代の新型コロナウイルスと大正期のスペイン風邪の流行を比較し、
私たちが歴史から何を学び、どう行動するべきかなどを聞いた。
(聞き手・飛松佐和子、川崎浩平)

「スペイン風邪の記録に関する率直な感想を聞かせてください。」
「県立図書館学芸調査課長の丸山伸治さんが調べた九州日日新聞の当時の記事や、内務省の記録を見せてもらった。興味深い調査だと思ふ。人との距離を空けたり、マスクをつけたりする予防対策は今も昔もまったく同じだ。人からうつることが極めてよく分かっているのも同じ。ただ水道がまだ整備されていないためか、手洗いやうがいに触れていないのが今と異なる」
「人類の歴史は病との戦いの歴史です。」
「私たちの祖先は何度も恐ろしい思いをしながら病を乗り越えてきた。病気が流行しても、だれかが生き延びて抗体ができる。それが繰り返されてきた。ドイ

熊本機能病院顧問 小野医師に聞く

繰り返す歴史学んで

新型コロナウイルス



スペイン風邪と新型コロナウイルスへの対処法について「ほとんど同じだ」と語る小野友道さん(熊本市中北区)

「病気がはやって社会が乱れる時に、祭りや文学が生まれることがある。悪いことばかりではない。今の状況を、いろいろな人がそれぞれの立場で、どんなこ

「やがてワクチンができるだろう。それまでは(せきエチケットや外出自粛など)基本的なことを守ることが大切」

「今回のコロナ禍を通じて、人間がより優しく謙虚になることを望んでいる。私たちは技術や科学だけでは生きていけない。また、インフルエンザは毎年、偏西風に乗って鳥が運んでくる。西からやってくる病への備えとして、県内に感染症の研究センターを創設することを提案したい」

「病気がはやって社会が乱れる時に、祭りや文学が生まれることがある。悪いことばかりではない。今の状況を、いろいろな人がそれぞれの立場で、どんなことを提案したい」